

英船フェートン號渡來

松平圖書頭の自殺

増田廉吉

文化五年八月十五日英船フェートン號の渡來一件は我が日本の爲めに種々な意味に於て重大事件たるを失はぬ。一は英人の日本に對する注意を新たにした前提とも見られ、一は日本自らが對外問題の日々急なるを知り、特に英語研究の急務なるを感ずるに到つた一大動機を作つたものとも思はれる。

加之この事件の爲めに當時の長崎奉行松平圖書頭康平の自殺の原因を作つた如きは、日本人として決して忘るべからざるものと思ふ。當時このフェートン號の船長ペルー(B. R. Pellew)はその航海日誌の中に

H.M. Ship Phaeton, is the first English ship that ever visited this place, and is moreover, the first European ship that ever obtained Bullocks from them.

我軍艦フェートン號の渡來は日本を訪ねた初めての英船であり、又日本から Bullocks (去勢牛) を手に入れた初めての歐洲船である——と特に念を押し言葉を重ねた所に何等かの用意があるものではないか。

この言葉の如くこの船の渡來が、果して日本を訪ねた英船の初めてであり得るか否かは問題であるにしても、茲に Bullocks を手に入れた事に於て確かに初めてのものであると云ふ意味らしくも思はれる。特に附言して

The Dutch ships that annually trade there, are compelled to accept of goats for provision, as the inhabitant always use their beasts for Burden, and never kill or eat beef themselves.

毎年貿易をやつてゐる蘭船と云へども、食料品としては山羊を得るに止まつてゐる。日本人は勞役に使用するのみで、決して殺したり喰つたりすることはない——

と云つてゐる所に又特別の面白味があるものではないものか、加之その Bullocks (去勢牛) だと云つた所に如何にも一種の皮肉がありさうにさへ感ぜられるのである。

彼等はこれより以前に屢々日本に貿易を求めてゐるが、然しそれは常に蘭人の爲めに阻害せられて成功し得なかつた。それにも拘らず茲に文化五年八月十五日フェートン號の渡來に依つて、兎にも角にも日本人から Bullocks を得たと云ふ、その事實に於て一種の新らしいレコードを作つた譯ではないか。

從來このフェートン號渡來一件を以て、英人は佛蘭西革命の影響よりして佛國に隸屬した和蘭人を苦しむる一策として、長崎に碇泊中の蘭船を掠奪せん爲めに渡來したものである——と解釋する向もあるやうであるが、必ずしもそうばかりとは思はれぬ點がある。

それが單に日本に滞在する僅少の蘭人を苦しめ、又長崎の地に果して碇泊してゐるものか否か、それさへ確定しない蘭船を捕獲せん爲めの渡來としては、その行爲が餘りによさげ過ぎてゐるやうでもあり、又餘りに日本と云ふ國の存在を無視した行爲のやうにも思はれる。

日誌の中には

return, but could not prevail on them, to accept of any compensation for they granted us, whether this was done with a motive of generosity, or upon a supposition that we should molest them did they refuse to comply with our request. I can not presume to say; however they appeared extremely anxious for our departure.

我等は金銭や武器や爆薬其他のものを呈供しその報酬として、船員の爲めに食料品を要求したが、それは容易に説服出来さうもなかつたし、又買つたものに對して何かを辨償しやうとしても、それを受けさせることは出来なかつた。或は一種の慈悲心を以てするか、又要求を容れなければ亂暴するぞと云つたやうな想像を懐かしむることに依つてすれば、それが出来得たものかどうか、それは今更云ふ譯にも行かぬ。彼等は如何にも我等の出帆に就て心配さうな顔をしてゐた――

など、云ふ。斯くして彼等は結局僅かに Bulllocks を得ることが出来たのである。だからこの去勢牛を得たと云ふことは、彼等の爲めに種々な意味に於て記念すべきことであつたことは論を俟たぬ。

日本側の舊記にもこの時英船より船員の爲めに水と牛と野菜との供給方を申出たことは明白であるが、その爲めに武器や爆薬其他のものを呈供しやうとしたことは全く見えてないやうである。

唯我が檢使の船が英船に近づいた時、彼等はその間に蘭人のゐるのを見て直ちにボートを下し、蘭人に迫つて銃砲や劍を差し向け押迫つて、遂に捕虜とした事だけが記載されてゐるやうである。

勿論この間の消息は全く英語を解することの出来ない日本人側の報告であつて見れば、其間多くの誤解を生じ易かつたことは大いに注意しなければならぬと思ふ。

英船に於ても相互言語の通じない事に就ては當初から相當用意があつたものと見え、長崎入港に先ち船中に一人の蘭人を乗り組みしてゐた。加之まさかの場合に處する爲めに蘭國旗までも用意してゐたものと見える。

果せるかな彼等は入港の際にその準備した蘭國旗を掲げて非常手段に訴へたのであるが、然しそれだけでは彼等の入港は許されなかつた。神崎鼻に於ける檢使の旗合は直ぐに彼等が蘭人でないことを暴露してゐる。

日誌の中には

In one of these boats prevailed two Europeans; sent a boat immediately to seeming them on board, and finding them to be Dutchman, detained them as prisoners of war; but gave them their liberty, previous to our quilling the port. 此等ボートの一隻に二人の歐洲人を認めたので、直ぐにそれを見届ける爲めに一隻のボートを出した。さうしてそれが和蘭陀人であることを知つたので、戦時に於ける捕虜の如く捕留した。然し我等がこの港を出帆する以前には解放してやつた――

とあるが如く、この時捕はれたのは即ち出島蘭館の書記テル・ハウセランとハット・シキンムルとの二人であつたことは勿論である。

この二人を捕留した氣持も、決して眞に戦時の際の捕虜と云ふ意味でなかつた事はこれを見ても明かである。察する所彼等蘭人が豫め船中に乗組ましてゐた蘭人は、よく日本語に通じなかつたものではないか、その爲め彼等は急場の一策として、その日本側にゐる蘭人に依頼して通辯を頼みたいと云ふ心算ではなかつたか。

それが圓滿に依頼する運びに到らず、言語の不通と風習の相違から、憎悪となり喧嘩となつて、遂に一悲劇を演ずることに立到つたものではないか。

その心根を察すれば要はそれ等二人の出島蘭人をして通辯がして貰ひたかつたのと、同時に日本の國情を知る唯一の仲介者になつて貰ひたかつたのではあるまいか。

その結果茲に初めて英船が乗組員の爲めに水、牛、野菜その他の食料品を要求してゐることが、日本人側にも理解されるやうになつてゐるのである。

然し一方この事變を聞き込んだ出島蘭館長ツーフは、嘗て前年に於て自國と英國との國交が決して平和でないことを知つてゐたし、又英國が自らの糊をかつて、日本との貿易を自國の手に奪はんとしつゝあることを實験してゐたのであるから、その驚きは決して小でなかつた。

ツーフはこの禍ひが出島なる蘭人の全部に及ばんことを恐れて、直ちに西役所に引き揚げ、その保護方を奉行に申出で同時に捕虜となつた二人の蘭人の取返方を追つたのである。

だから當時長崎奉行松平圖書頭がその立場に窮せられたことは、察するに難からぬ譯である。

艦で英船からはボート三艘を下して濠内を乗廻し、剩へ稻佐方面から戸町方面にかけて悠々その姿を現はしたと云ふのであるから、その有様を見たツーフは勿論としても、日本人側に於ても種々の憶測を恣にしたことは無理からぬことと思ふ。これを以て彼等は汎く蘭船を索めんとして駆け廻るものであると解釋したのは、例へそれが蘭人側の宣傳より出たものであつたにせよ、日本人としてはそれを信するより外に途を知らなかつたに相違ない。

然るに日誌を見ると、彼等はこのボートを漕ぎ廻つたことに依つて、長崎港の良港なることを知り、恐らくは世界の一等港であらうなどと賛美してゐる。加之次の如き一節を書き加へてゐる。

During our short stay at this place, the few cursory remarks I have made; are not intended as a correct account of the place; or its inhabitants; but merely for my own satisfaction, should I ever have occasion to visit this port of the Globe again.

この短かい滯泊の間に一種の皮相な觀察を作つた。この土地や住民の爲めの正確な記録とする氣はない。唯單に私自身の氣持として今一度地球上のこの地點を訪問する機會を持ちたいと思ふ——

など、一種この地に對する懐かしさを感じしめてゐる事實より推す時は、前記の如くボートに依つて稻佐方面から戸町にかけて乗り廻したことも、これを以て蘭人を苦しめん爲め、蘭船を捕獲せん爲めになしたものと解釋するのも、餘りに殺風景なやうにも思はれはしないか。

然るにも拘らず我が奉行から捕虜となつた蘭人二人の取戻方を英船に迫つた時、その間の通詞の申出に依ると、

——英船は現在食料に窮して水や牛や野菜等を要求してゐる。だから捕虜の蘭人と引換えにそれ等の食料品を貰ひ受けたし。それに非ざれば、今晚中に日本船の全部を焼討にせんとしてゐる——

こんな報告を齎らしてゐる。この報告も日本人通詞の直接聞き得た言葉でないことを知る時、其所には疑ふべき餘地の未だ澤山にあることに氣がつく。

然しこの當時まで、未だ全く英語を解し得なかつた日本人としては、この報告に對して異議を申立てる何等の資格もなかつたことは勿論である。

その時の實情より見ると、英人の申出は先づ豫て乗組んでゐた一人の蘭人から、捕虜となつてゐるホウセマンかシキンムルに傳へられ、それをまたその二人の蘭人から更に我が檢使その他の通詞に傳へられたに相違ないことは察するに難くない。特に

——食料品を得るに非ざれば今晚中に日本船の全部を焼討すべし——など、傳へられた言葉は、果して英船の口から出た眞の言葉であるか否か、大ひに疑はしいと云へば云へるのである。

當時英人が盛んにその侵略主義を發揮し、從來の日蘭貿易を自國の手に奪はんものと隠謀しつゝあつたことを知つてゐた蘭人にとつては、茲に英人のなす凡ての行爲が侵略主義に見え、隠謀と解せられたのも強ち無理でない。加之今その横暴なる振舞に對して自ら對抗すべき勢力を持たない蘭人にあつては、先づ日本人を動かしてその幾分を復讐するより外に、途はなかつたのである。

茲に於て出島蘭館長ツーフはかれの外交家として名をなした、所謂英國人追放ひの手段を行つたものと斷しても、決して過言でないと思はれる。

このツーフの英人追放ひの手段と云ふのは、要するに我が奉行に英人の事を悪さま進言して奉行を憤らせ、結局奉行の力を借つて英人を追放はうと云ふ方法に外ならぬ。ツーフがこの方法と手段を用ひたことは決して初めてでないこと附言した置きたい。

之等蘭人の傳へた英人の申込みだと云ふものを、正眞に聴取した我が奉行松平圖書頭が、烈火の如く憤つたと云ふことも半ばはツーフの外交手段に原因するものではなかつたか。

その際にも日本人側には現に奉行に對して『事蘭人に關するものであるから、それ程大げさに立騒ぐ要はありません』との意見を提出した、大村藩の副役北條李之允の如きもあつたのである。

それに對して圖書頭は

『例へ蘭人と云へども我が出島にある以上日本人と同様であるべきである、速かに英船を討つて捕虜となれる蘭人二人を取戻すべし』と嚴命してゐることは明らかに舊記の示す所である

即ち圖書頭は捕虜となつた蘭人を取返した上、直ちに英船を燒討すべしとして、海陸の警備を佐賀と大村の兩藩に念がし

めた如きも、單に奉行自身の兵法ではなかつたのではないか。

其時奉行の前に出頭した大村上總介の如きは、特に周圍の事情を察して、

『佐賀藩にても同勢相揃ふまでには日合もなく、人數不足では却つて返り討ちになる心配があり、又我が大村にても出兵其他萬般の用意までには今晚中は勿論、明日中までにも無理ではないでせうか』

と云ふことを極力言上してゐる。それにも拘らず奉行にはこれを聴き入れず一生一代の立服をしたと云ふ。

特にこの時の圖書頭の立服を、副役北條李之允は一生一代の立服だと記録してゐるが、この言葉にして誤りがなかつたらば、圖書頭の平素は決して別に短氣な性質ではなかつたらうと思はれる。

別に圖書頭の平素に就て歴史的に調査した譯ではないが、此の時の實録に徴し且つそのそれを信する場合は、圖書頭は寧ろ沈重な性質で、物に動せない仁ではなかつたか。

然し如何に沈重な圖書頭にしても、以上の如き思ひもかけぬ英船の來襲に遇ひ、而もその年々には來るべき筈の蘭船も來らず、流石の長崎港も閑散で寧ろ無聊を啣つてゐたやうな時代であり、隨つて港内警備の如きも實はあるかなきかの有様であつたことから察する時は、幾分度を失はれたとしても決して無理からぬと思ふ。

度を失はれたと云ふことよりも、寧ろ策の施すべきものがなかつたのである。この罪を獨り圖書頭にのみ負はせることは全く無理なことで、實は一種の國難として其の責は幕府のものにあるべきと思はれるのである。

斯くの如くにして英船入港後三日目即ち八月十七日、彼等は日誌の示す如く *Buildings* (去勢牛) を得たと云ふ、歐洲に於ける新レコードを作りながら悠々として長崎を立ち去り、又蘭館長ツーフとしても例の外交手段に成功し、うま／＼と英船を追放した譯である。

獨り我が奉行圖書頭としては焼討すべき英船は影もなく立去り、無理から呼び寄せた諸藩の兵は追々長崎に押し掛けて、英船の在所を追ると云つた有様、今更見す／＼英船をにがした海上整備の佐賀藩を責めた所で仕方がないのである。

顧みると今度の英船渡來に關して特別に憤り、各藩の意見も聞き入れることなくして、一生一代の色をなして立ち騒いだのも、實はと云へば圖書館自身ばかりであつたやうにも思はれた。

例へ蘭人二人が英船の爲めに勝はれた爲めだとは云へ、今二人が安全に返還されて見ると、彼等二人の言ひ分では、英船はもと／＼食料欠乏の爲めに水と牛と野菜とを貰ひたいと云ふ外、別に悪意があつたやうにも云つてゐないのである。だからと云つて今更蘭館長ゾーフの言動が餘りに業々しかつたとも云へない義理である。

茲に於て圖書頭は遂に十八日の曉立山役所裏手に於て自殺することとなり、佐賀藩主は百日間の閉門と云ふことになつてゐる。

此等は全く日英兩國間の國交問題から惹起した事件でなくして、實は長崎出島に於ける蘭人との曲折から、端なくもその渦巻の中に日本が巻き込まれ、殊に館長ゾーフの外交的術數に利用せられ、さうして遂に奉行松平圖書頭の自殺となり、鍋島の閉門となつたものではあるまいか。(完)